

## 小泉八雲のことども(続き)

根 本 重 熙

### ハーンの前任教師

ハーンが、松江市にあった島根県尋常中学校および同尋常師範学校の英語教師として赴任する以前に、同校の初代外国人教師として勤務していたのは、既述の通り、カナダ人エム・アール・タットル (M. R. Tuttle) であった。彼の教え子は語っている。「旧師小泉八雲先生を語る」松江中学校編)

「タットル先生には、初めて中学校で、外人の方に教えられたのであるから、興味をもったものであった。ところで、この先生、大変な寒がりであって、特別の教室で、ストーブを焚いて、生徒は、その教室で代る代る教えを受けた。後には、<sup>つばね</sup>頭巾を被って教える。だんだん授業を受けていますうちに、ストーブの前に毛布を敷いて、遂には、ごろりと横になるという具合でした。これには、我我書生ではあったけれども、何だ先生たる者が、我我を馬鹿にしている。こんな先生は、つまらんという事になってしまった」(島根県簸川郡大社町、大村貞蔵談)

「タットル先生はお年の若い、背が高い、カナダの方で、向うの法律学校か何かを卒業して、おいでになったと承りました。長い脛で教室の机を、ずっと跨がって授業があるという風で、寒がり、毛布を敷いてごろ寝して、休み時間には、そこで寝ておられるような事がありました。生徒を愛したという話がありましたが、成程愛されたのですが、教育、知識の程度が、先生は低かったのでしょうか。生徒が相当騒ぎますから褒美が出ます。それは、カナダの古新聞でございました。タットル先生は、我我には“ボーイ”であった。その時分は三年でした。ヘルン先生の時は四年生、“ゼントルマン”と言われました。タットルは稼ぎにきている。金もうけに来ているという印象が何時もあった。服など、穴があいたものを着ていた。学校の先生とか教育とかに経験のある人ではないという感じがしました。それから、タットル先生は、長野県の先生になるところ、同県でも要らんということになった」(松江市雑賀町、野津静一郎談)

山陰新聞 明治23年7月19日(土曜日)

- タットル氏解雇 当尋常中学傭英人英語教師タットル氏は、<sup>やとい</sup>なお傭約定中の処、俄然此中解雇と為れり。然らば、氏はドウするかというに、当分は依然滞松し、松江義塾と進取学館との掛持英語教師に被傭の相談整うべ

く然らば中学校はドウするかというに、更に英語教師には、英国人を備入れんかとの話し合いもあるとか言えり。

同年同月29日（火曜日）

- 英人タットル氏 先日迄当中学校の英語教師たりしタットル氏は、其後私立学校の教師の相談<sup>まと</sup>ならず。昨日当地を出発上京の途に就けりと聞く、一旦上京の上、愛媛県の学校へ聘せらるる筈なりと。
- 斎藤熊太郎氏 当尋常中学校校長たる同氏は、昨日タットル氏と共に上京せり。或いは言う。タットル後任備入の用務も、暗に帯ぶるにはあらずやと。

西田千太郎日誌（島根県郷土資料刊行会）の中の同月同日の項に……………“中学校教師タットル氏、尚雇期限中なれども教授上不完全の点無きにあらざるを以て、本月限解雇。本日松江を去る”とある。

タットルの後任者ハーンの招致に当り、県当局は知事とハーンの間には仮条約を締結させた。（筆者注：仮条約を締結してハーンを赴任させ、その上で校長との間で同文の本条約を結ぶ方針）

#### 仮条約書

此条約ハ、明治廿三年即チ西曆一千八百九十年、七月東京ニ於テ、一方ハ島根県知事籠手田安定他方ハ、ラフカヂオ・ヘルンノ間ニ締結シタルモノトス。

- 第一款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、一千八百九十一年三月マテ、七ヶ月間、島根県松江ニアル尋常師範学校及ヒ尋常中学校ニ於テ、英語教授ニ従事スヘシ。
- 第二款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、俸給トシテ毎月廿六日ニ於テ、日本通貨百円ヲ受取ルヘシ。  
（付） 右ラフカヂオ・ヘルンニ係ル借家料及ヒ其ノ費用ハ一切支給セサルヘシ。
- 第三款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、如何ナル事情アルモ、日曜ニ於テハ教授又ハ其ノ他ノ事務ニ従事スルコト無カルヘシ。
- 第四款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、各週ニ二十四時間授業ニ従事スヘシ。
- 第五款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、学校規則ノ当条約面ニ抵触セサル件件及ヒ条約面記載ノ件件ハ一切遵奉スヘシ。
- 第六款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、病氣又ハ已ムヲ得サル事故ニテ、連続三十日間職務ニ従事スルコト能ハサルトキハ、爾後半額ノ給料ヲ受取ルヘシ、尚又三十日ヲ経テ尚職務ニ従事スルコト能ハサルトキハ、此条約ヲ取消スヲ得。而シテ即日ヨリ俸給ヲ受取り得サルモノトス。
- 第七款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、学校規則ニ反シテ、尚又校長ノ許可ナクシテ、自己ノ勝

手ニ依リ、職務ニ従事セサルトキハ、欠課日数ニ応シテ俸給ヲ削除シ残余ヲ支給スルモノトス。

第八款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、自己ノ勝手ニヨリ、条約期間中解約セント欲スルトキハ三十日前ニ於テ、第一方ノモノヘ通知ヲ与ヘ之ヲ為スコトヲ得。而シテ其三十日ニ満ツルト同時ニ此条約ハ無効タルヘシ。

第九款 第一方ノモノヨリ、右ラフカヂオ・ヘルンヲ、条約期間中ニ解雇セント欲スルトキハ其ノ月ノ俸給ト別ニ、一箇月俸給ノ金額ヲ支給シ之ヲ為スコトヲ得。而シテ之ト同時ニ此ノ条約ハ無効タルヘシ。

第十款 右ラフカヂオ・ヘルンハ、学校規則又ハ学科ニ関シ意見ヲ述フルノ権ヲ有スヘシ。

第十一款 右フランカヂオ・ヘルンハ、学校生徒ニ対シ宗教ノ利害得失ヲ談論スヘカラス。

前條款約定ノ為明治廿三年即西曆一千八百九十年七月、両者記名ノ上調印スルモノナリ。

島根県知事 籠手田 安定

ラフカヂオ・ヘルン

(島根県庁蔵「常置委員会」議事録)

前任者タットルとの契約書は第九款までであったとのことである。県当局が前任者の宗教活動に懲懲した結果の予防策であるとの事である。前述のように教育指向型の伝統を継承しての、進取的文教政策に基づく優良外人教師招致運動もその成果を現実のものとするのは容易な業ではなかったらしい。田部氏はその著書“小泉八雲”の中で“中学時代に米人教師が来任した時は、全校生徒が学校を一日休んで国道を二里（8キロ）程行って出迎えをした。それ程に歓迎され崇拜された。優秀人種なるがためであろうか。その外人の多くは自国の風俗習慣を貴ぶと同時に、日本人を未開劣等の人種と見るのが普通であった。日本の事物を貶して二言目には「英国では」「アメリカでは」と反覆するのをつねとした”と述べている。次いで彼は“この優秀人種として仰がれたそれを自任していた英米人の中には意外に無学の人があり、手に錨の入墨をした人もある。教室で煙草を噛んだり、床の上に唾を吐いたりした人もあり、教室で売るために小冊子を持ち込んで、二冊以上買えば割引する等と言って、日本学生の軽侮を招く者もあった”と回想を述べている。このような時代に、布教衝動に振り回されず、日本人を未開人種と見做さない、平衡感覚の持主という、三拍子揃った外国人教師など、暁天の星という奴であろう。先のタットル先生も特に変わった存在とは言えないかも知れぬ。そこへ棚から牡丹餅式に、その星のハーン先生が登場したので、前任者との極端な対照の故に招致運動関係者一同の喜びは一通りのものではなかったと思われる。さて当時の新聞記事から、その反応を確かめて見よう。

明治23年9月14日 松江日報（173号）

●お雇教師ヘルン氏。

本邦に在留せる西洋人は、とかく自国の風を固守し我邦の事物を目して野蛮なり未開なりと悪し

ざまに批評する癖あれども、今度本県に雇入れられたるお雇教師ヘルン氏は感心にも全く之に反して、日本の風俗人情を賞讃すること頻りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食物を食し、只管日本に癖するが如き風あり、氏が当地に着松せりと報に接するや、或人は直ちに氏を尋ねんと思いたれども、何分唯一枚の浴衣をつけたるのみなれども、斯様なる風にて始めて当地に罷り越したる外人を尋ねるは、大いに其礼を失するものならんとて態態其家に帰りて洋服に着換え、それにより氏の旅宿に赴きたるに氏は早速出でて之を迎え某氏の洋服を着したるを見て跪坐するの困難を察し、椅子を出して之に坐せしめ、自身は浴衣のまま布団の上に坐し、いと愉快げに当地方の談話を為したりと、某氏も之を見て大いに其意外なるにあきれ、然らば態態洋服に着換えざりしものと後悔したりと。それより某氏はヘルン氏に向つて当地は山陰の奥に避在して西洋人等の出入すること極めて稀なれば、今度当地へ来松せられたるに就ても万事不便勝ちならんと語りしに、氏は微笑して否否貴見大いに違えり。予は日本の風俗日本の習慣を愛すること最も甚しければ、西洋人の常に往来して人人既に西洋風を見習いたる地方は之を見るを好まず。古来の風俗習慣を其のまま保存する地方に滞留するは予の最も好む所なり。故に予は日本人の住む所ならば如何なる所にも之に住居せんと決心せり。今日とても予の食物は少しばかりの鮎、数箇の卵、二三合の日本酒さえあれば之にて十分なり。無理に西洋料理を食するに及ばぬことなりと喋喋弁じ去りたりと言う。因に記す。氏は過般日本玩弄物についての著述を為さんとして種種材料を収集中なりしが近来半以上脱稿をつげたりと言う。

同24年5月26日 松江日報(373号)

●メール新聞記者大いにヘルンを賞す。

我が尋常中学校お雇教師ヘルンは西洋人として稀な日本好にして其衣服飲食より居宅装飾に至る迄一切万事日本風にて人をして、一見日本人なるかを疑わしむる如くなること、及び氏は多年米国にありて操觚家となり、此社会に雄飛し極めて詩文に妙を得たることは、毎度本紙に於て報道し置きたる所なるが、当時横浜メール新聞記者たる頭本元定農学士は之に就いて、過般上京中なりし当地の某氏に語りて曰く「ヘルンは我がメール新聞の通信員にして、時時日本の事情に就いて通信すれども、氏の如く日本の真情を穿ちて一読掬すべき名文を草するものは、数多の通信員中一人として之あるなく、今春、氏の通信にかかる和田見情死事件の如きは、能く日本娼妓の実情を直写せるを以て、外人中に之を購読するもの甚だ多く、同日の新聞紙は忽ち売り切れたり。氏の如き文章家は中中得易からざるものなれば、務めて之を優待して長く日本に滞留せられたきものなり云云。

而して同農学士はヘルンにその刺を通じて、今後の交際を求めたりとか。斯くの如き良教員を得たるは、我が中学校の最大幸福たるものなれば、予輩は県下の為、世人が厚く同氏を待遇せんことを希望せんと欲するものなり。

松江の新聞には、ハーンに関する記事はなかなか多い。地元新聞の好意的報道群の先触をば背景に所謂“鳴物入”の来松は、単なる新任教師とゆうよりも、知名の賓客的存在として、松江市民の

友情敬愛を以って迎えられた事實は、教師ハーンと、生徒の父兄側との間に、相互信頼の理想的人間関係を確立するに至り、彼の教師としての任務達成の為に偉大な寄与となったことは確<sup>たしか</sup>であるろう。

宗教に対して無色な教師（ハーンの宗教観）

ハーンは1893年（明治26年）8月、熊本から落合貞三郎（松中と東京大学での教え子）に宛てて書き送っている。（長文であるが採録する）

君の試験に於ける成功を聞いて、大いに愉快を覚えた。次の学年に於ても、君に幸運と健康があることを祈る。私はまた君に利害の深い別の問題に関して、君に話したいのだ。どうか私の言葉に注意を払って考えてくれたまえ。私はただ君の幸福を願うだけだ。だから、私の言葉は君の注意と考慮に値するというを記憶しなさい。私はキリスト教について君に話したい。それは宗教としてであって、宗派として話すのではない。君は私のこの区別を理解するだろうと思う。宗教は人をして正直な生活を営ましめ、お互いに対して親切ならしめる道徳的信仰である。宗派は何が真正なる宗教的教訓であるかに関する信仰上の差異によって作られたものである。かようにして、仏教には幾多の宗派がある。またキリスト教にも幾多の宗派がある。しかし宗派を作るものが、仏教を作っているのではない。またキリスト教の宗派を作るものがキリスト教を作っているのではない。真理が、道徳的真理が、宗教を作るのだ。宗派は経文の意義に関する意見の差異によって作られる。

この事は、これ迄にして置く。私は今、君の友人として、皇帝の肖像或いは偉大な死者の墓の前で礼を行うことを拒むのは、キリスト教ではないということを君に告げようと思う。もしそれがキリスト教であると君に教える者があるならば、その人はキリスト教信者ではなく、狂信者であって、且つ国賊である。私共が英国の国歌を歌う時、私共は何時でも脱帽する。私共が女王陛下のご名代の前へ出る時にも脱帽する。女王陛下の健康を祝するに当っては起立する。私共は女王は神の命令によって支配すると教えられている。共和国を除いてはすべて、ドイツでもオーストリアでも、イタリア、スペインに於ても同様だ。皇帝の肖像の前で礼を行うことはキリスト教徒にとっても全く正当である。そうするのが忠義で高尚且つ善良である。それを拒むのは無知で下品である。それは少しもキリスト教ではない。

さて墓や寺院に関してキリスト教の習慣はどうであろう。キリスト教の習慣は他人が信仰している宗教に対して、当然でもあり、また正当でもある、尊敬を払うことになっている。もし私がキリスト教の教会へ行ったら、たとえ私がキリスト教徒でなくても、私は帽子をとらねばならない。もし私が回教の寺院へ行ったら、私は靴を脱<sup>はき</sup>がねばならない。かかる尊敬の表象は単に社会的である。それは正しい<sup>もつとも</sup>尤なことである。例えばメキシコで宗教的行列が通る時丁寧な人人は皆脱帽する。それはこうゆう意味だ。「たとえ私は貴君の宗教を奉ずる者ではなくとも、私は貴君の宗教に対して尊敬を表す。貴君が天に向うその祈禱と善良たらんと思う願望に対して」

また葬式が通る時脱帽する。それは「私の知人が死んだのではないが私は貴君の悲に対して同

情する」という意味である。

私の親愛なる落合よ。如何なる信仰を君が持とうとも、君は皇帝の墓、祖先の記念、他人又は他国の宗教に対して尊敬を示すことを拒むに及ばない。キリスト教は決してこんな無礼を教えない。ただ狂信者のみそれを教える。たとえ彼が理由を挙げてそれを教えても理解されるものではない。私は君の宗教的信仰を兎や角言う考は毛頭ない。それが私の趣旨ではない。私は真正の宗教と関連する社会的行為について君に語ろうと思うだけだ。いかなる正直な宗教も君に何等の不幸を惹起すべき筈はなく、又は君をして他人から非難を被らしむべきものではない。宗教は心からのものでなければならない。それは帽子や靴の問題ではない。祖先に対する正直な、習慣と敬礼に向って、叩頭或は脱帽によって尊敬を示すことを拒んではいけない。自国及び自国民の信仰に尊敬を示すのを拒んで憎悪を招くのは、君の前途を害することになるだろう。このような尊敬は君の信仰と何等の関係はない。それは社会的に礼義正しいこと。紳士らしいことの問題である。そして君が拒む時には君の信仰に対して判断が下されなくて、君は単に下品で真の紳士でないと考えられるだろう。真正の紳士は一切の宗教を尊敬する。それが西洋の観念である。誤解してはいけない。この事は君の真の友且つ教師である私から申すのだ。

また同年11月にも通信した。

(前半省略) 君が犯したかも知れない如何なる誤でも、それに関しては最早<sup>もはや</sup>考えてはいけない。皆の者が、早く忘れてしまいうだろうから。ただ君を幸福ならしめることばかり考えるがよい。しかしキリスト教については無論それは君自身の良心の問題である。だから君が疑惑に陥っていない以上は、少しも勧告を呈しようとは思わない。私はただ君にこれを告げ得るのみだ。所謂キリスト教なるものには種種雑多の形式があるということ。実際非常に沢山だ。しかし「高等キリスト教」なるものは、純正なる倫理の法則である。そしてその倫理の法則では、一切の文化が進んだ宗教——日本、シナ、印度、ペルシャ、アラビヤ等いずれの国の宗教でも——の中には幾らかの永遠の真理があることを認めている。何故なら一切の宗教は、同胞に対する義務と行為についてその最奥の教訓に於て一致しているからである。従って一切の宗教は当然善良な人人の尊敬を受けるべきものである。しかしまた、一切の宗教の中には、余程善良な人人でさえ賛成できない要素がいくらか存在している。それは宗教の真正なる部分の欠点ではなく、ただ社会的状態の欠点である。如何なる社会状態もまだ完全の域には達していない。そして一切の人人が完全に善くなる迄は一つも完全なる宗教の体系を見ることはできない。しかし如何にして善くなるべきかという事は、一切の文化が進んだ宗教によって説かれている。殆ど一切の永遠の真理は、彼も説き、これも教えている。それ故に社会とゆうものは、その宗教の中に存在している幾らかの誤謬があるとして、その宗教を捨て去ることはできない。そして、それぞれの宗教はその国民の正邪に対する経験、その国民の道徳についての知識、を表わしている。しかし国を異にするに従って、社会組織が全く異っているから、甲の国の宗教は、乙の国に適しないこともある。これ即ち外国宗教の

輸入が往往ある国の人民全体から反対を被る訳である。何故なら一つの国で正当なことも他の国に於ては正当でないこともあるから。シナや日本では父母の許を離れたり、彼等が老いてから顧みぬことは正しくない。しかし英米及び他の諸国では子女は両親から去って行く。彼等を扶養することを義務とは思わない。それらの国々には、東洋に存するような家族関係は無い。だから西洋の宗教の中にある幾多の事が、日本での、より親切で、仁慈に富む生活に適應しない。また忠義を教える宗教もあり教えないのもある。日本が強くなり独立を維持して行く為には、日本の国民がいつまでも忠義であることが必要だ。日本の古い宗教は忠義を教える。従ってそれは依然として日本にとっては甚だ有用なのである。これ即ちその宗教に向って敬意を払わない或るキリスト教徒に対して、憤怒が示されている所以である。彼等は教義を信じない為に非難されるのではなくただ忠義でないと思われる点で非難されるのである。恐らくは君が科学的哲学を研究するだけに年令が長ずる迄は、宗教問題について余り考えない方がよいだろう。何故ならこのような問題は、社会、歴史、法律、国民性、科学に関連して研究されねばならないから。このような訳で中中の難問題である。

君がもし近代の宗教思想に関する西洋人の最も高尚な思想を読もうと思うなら、最高の宗教は最高の科学と一致することを君に示す数巻の小冊を君に送ってもよい。私が最高の宗教と言うのは正しい行為の永遠的法則に対する信仰を意味する。尤も先に言った通り苟もこのような問題について考えるには非常な研究と知識が必要である。私が君に与え得る一般的最善の勧告はこうである。即ち「君が新しいことを教えられたからといって、それを信じてはいけない。自分で考えてみるがよい。そして疑わしく思ったなら君の本心に従わねばならない。これに反して、君が教えられている古い事は、社会にとって貴重なもので、数千年間に亘って有用であった。だから私共はそれを軽んずることはできない」と。

私は君に読ませる為ギリシヤの昔の物語集（訳者注：チャーチ著挿絵入美装の“ギリシヤ悲劇物語”）を一冊贈る。多分それは君に興味を与えるだろう。君はそれらの物語によって古代ギリシヤの生活が色色の方面に於いて近代生活とどんなに異っていたかを知るであろう。君はまた、どんな書物（小説、歴史など）を読みたいと思うかを私に知らせてくれ給え。折折君に贈り得ると思う。しっかり勉強するがよい。そして決して失意してはいけない。どうしたら君自身を高尚完全な人物となし得るかというのみを考えるがよい。それから公生涯に於ける最上の人人は概して彼等の青年時代に、沢山の失敗を演じ沢山の困難に陥ったことのある人人だとゆうことを記憶せねばならない。決して決して恐れるには及ばない。君自身の本心を除いては。

ハーンは同年9月に例のチェンバレン教授にこの消息を伝えている。

（前半省略）日本人の性格の妙な例に先日気がつきました。私は手紙で知ったのですが。幾人かのキリスト教信者の学生（その中に私の古い学生が一人居ました）が、ひどく頑迷な男の教を信じて、どこかの神社の前で礼拝することを拒もうとした。それで君が想像する通り、他の学生か

らは、よく待遇されなかった。私はその中の一人、誠に美しい心の少年に非常に同情した。そして長い説明と非難の手紙を書きました。私はその事を、常識的な礼儀と普遍真実の宗教とゆう根拠に置いた。それから躊躇した。もしこんな手紙を同じような場合、英国の学生に送ったならその結果は単に禍となるだけでしょう。最後にそれを先生に送った。そして先づそれを先生が読んだ上で本人に渡すのと渡さないのと、どちらでも最善と考えられる方法をとって下さいと頼んでやった。先生は渡した。私が驚いたり喜んだりしたことには、その結果はこの上なく幸でした。キリスト教の学生たちは相談して思違であったとゆう事を立派に公然と白状しました。彼等は矢張キリスト教徒だが、私が開いている限りでは最早あんな間違いなどしないと思います。これは中中よいでしょう、と。

彼（ハーン）は同年9月27日西田千太郎宛の書簡の中でもこの問題に触れている。

“私は仕事が決ま溜っていたので貴君のご親切なお手紙に対して、早速のご返事を差し上げかねていました。私が落合に送った手紙が可成有益であったのを知って愉快に感じました。私はあの生徒が好きですから、彼がある狂信者に誤られて同窓生との仲がよくないようなことは甚だ可哀相に思います。これらの説教者は外国の頑迷な連中の最下級を代表するもので真正のキリスト教徒ではありません。彼等は、私が邪魔をしているとか、私が彼等の事業を害したとか、私は完全に墮落した悪人だとか申します。と（以下省略）

1894年（明治27年）2月16日チエンバレン教授に宛てて書き送っている。（前半省略）確かに貴説の通り全然無宗教であるよりは、文化的な宗教をもった方がよいだろうと思われる。そして日本の危険は、何等の宗教を持っていないとゆうことである。「神は存在するだろうか。私には分からない」こんな文句を含んだ、生徒（熊本第五高等学校）の作文がどんなに沢山私の手に入れることか。貴君には想像も出来ないだろう。貴君にとって奇異と思われるだろうが、私は決してこれを嬉しくは感じないのである。私は不可知論者、無神論者等等、神学者が何と私を呼んでもかまわない。しかし18才乃至20才の青年の心にとって無限界の神秘が与える一切の敬虔および慈愛の念を欠くということは如何なる損失だろう。宗教は従来私にとって重大なものとなっている。そして私は今なお漠然朦朧ながら深く宗教的なのである。もし宗教観念が全ての子供の心裏から消え去ったならばこの世界は醜悪なものとなるだろう。何故なら宗教観念は少年の詩であって一切後年の思想に色彩を与え或は少くとも他日宇宙的情緒を可能ならしめるものであるから、と。

前述の通り、タットル先生の宗教活動（その具体的な内容は不詳であるが、面倒な事ではあった）に懲りた末に、後任者にそれを繰返されないようにとゆうので、最初から宗教の“利害得失”を含め学内でそれを取り上げる事をタブーとして置きたいとゆうのが県庁と学校当局の真意であったらしく思われる（筆者に）。キリスト教の生徒の中には神社参拝や戦没者墓地拝礼拒否者が



出るにおいて、宗教活動を禁止されていた当のハーンが書簡によって、熱心に宗教の論究を展開した。同県教育関係者一同に安堵の胸を撫で下ろさせたであろう。この宗教的中立性も外国人教師達多数の硬直型キリスト者の中では稀少な長所であろう。上記書簡で彼が言った、「“不可知論者”とでも又は“無神論者”とでも呼ぶがよい。しかし私は宗教を重視する」とは同年の知友 Chamberlain 教授にとっても所詮は“奇異な友”であったかも知れない。彼の教え子達にとっては得難い師父であったが。

以上の奇異な（もしそうであれば）宗教観はハーンにとっては偶然ではない。彼の在米時代、1885年7月（ニューオーリヤンズにて）ウエイランド・ディ・ポール師（牧師）に宛てて、（前半省略）先のお手紙について私はジェイムズ・フリーマン・クラークの著作は好まないと言うことを申さねばなりません。非常な労作を以てしたものではありませんが。その結果出来たものは宗派的目的がある為は無価値になっています。クラーク氏はキリスト教と比較して他の宗教を貶す先入目的をもって研究を始めたのです。それと反対の試をしたら矢張り同じでしょう。全く不合理な偏狭なやり方です。及ばずながら私は比較神話を研究してみて全然異った結論に導かれたのです。即ち偶像神であれ、唯一絶対神であれ、幼い人間の思想であれ、老成した印度哲学の夢想であれ、礼拝の一般観念に私が少しの不合理をも認めなくなった程偉大で、深く真摯で、悲壮な、人類の普遍的向上心は、彼の無限と至尊との方へ向っていることを私に示したのです。（一部分省略）ヒンズーの光明神の偶像に対する以上の尊敬を、十字架にかけられた神に対して感ずることが当然に出来ないのも同じ理由からなのです（以下省略）と。

“知られぬ日本の面影”の序文の中でハーンは述べている。

（前半省略）国民の質朴にして幸福なる信仰を破壊して、これに代うるに、西洋では知的に<sup>つと</sup>夙に時代<sup>おくれ</sup>後となった残酷なる迷信——宥<sup>な</sup>恕せぬ神と永遠の地獄とゆう——を以てせんとする頑迷外人の努力に向って、近代化された日本の批判的精神は、今や反抗よりも寧ろ間接の援助をなしつつあるのは実に遺憾とせねばならない。160年以上も昔に、ケンペルは日本人について“道德の実行、生活の清潔、信仰の儀礼に於て、彼等は遙かに欧州人に勝っている”と書いた。そして開港場に於ける様に固有の風儀が外来の汚染を蒙っている土地を除けば、この事は今日の日本人に関しても本当である。私自身<sup>いいた</sup>竝に幾多の公平にして且つ一層経験ある日本生活の経験者の確信によれば日本はキリスト教に帰依することによって道德的にも、其他の点にも何等得る所なく、却って失<sup>おこ</sup>所が頗る多い”と。

明治37年（7月18日 ハーンの死去2ヶ月ばかり前）早稲田大学の塩沢博士の通訳で大隈侯から求められて会見した時大隈侯が“従来日本が他の宗教を同化したように、キリスト教をも同化するに相違ない”と言ったのに対してハーンは“キリスト教は同化しない宗教である。マホメット教とキリスト教は最も侵略的な宗教であって決して他のものと調和も同化もしない。キリスト

教は日本の文明制度、習慣を破壊せねば止まないから危険千万である”と断言した、と。

ハーンの終生の親友達について

a. エリザベス・ビスランド嬢 (ウェットモーア夫人)

南北戦争の結果破産したルイジアナ“Louisiana”州の大地主トマス・ビスランドの娘。1861年2月生れ。家計を助けるために新聞記者となって、ハーンが記者であったニュー・オーリアンズのタイムズ・デモクラット“Times Democrat”社に勤務した。ハーンの文章を読んで感心し交際を求めた(1882年冬)その後ニュー・ヨークに移り1889年(明治22年)11月にコスモポリタン“Cosmopolitan”誌のため、別の雑誌社の婦人記者の一名と、世界一周競争を試みた途中横浜に24時間を過した。この時グランド・ホテル“Grand Hotel”でマクドナルド MacDonalld (後出)と知り合った。帰米後ハーンにこの人を紹介した。来日早々ハーンが直面した大難局(就職の問題)からハーンを救い出すのに、この二人の縁故が絶大な偉力を発揮するに至ったことは既述した。彼女は1891年鉄道王チャールズ・ウェットモーアと結婚。ハーンは彼女に、日本雑記“A Japanese Miscellany”を捧げた。彼女がハーンの没後「伝記及び書簡集」2冊と「日本の手紙」1冊を編集したのは遺族のことを考えてのことである、と。明治44年彼女は夫と共に世界一周の途中で、大正4年大正天皇の即位式拝観の為に夫と、大正14年に(夫の死後)と、計4回来日した。田部は明治44年小泉家で彼女と初対面したがこの時の日本料理の午餐会で刺身漬物まで彼女は残さなかった。又その滞在中に茶の湯、生花を習い、帰国後はオイスター・ベイにある広大な邸宅を売り払って、英国サレイ州ウエスト・バイフリートに移りその住居の一間を“千鳥の間”と命名し日本の美術品、骨董類で装飾した。その後ワシントンへ帰りウッドランド・ドライブ2800に大邸宅を造り“音無庵”<sup>おとなしおん</sup>と名付けて日本式室内装飾を施した。玉露茶、羊羹、水飴が好物で、小泉家を通じて、日本橋の山本と本郷の藤村から時々取り寄せた。模様つきの日本式封筒や巻紙を常用し、日本式桐篋<sup>まりだんす</sup>筒を愛用した。夫の没後もその邸宅に住み日本大使館員たちを時々招待した。軍縮会議の加藤、徳川両全権等を招いたこともある、と。

夫が存命中は男女20人の召使が居たとのことだ。田部が大正11年に夫人に招かれて客として逗留した時には8人であった。食後の飲物を聞かれた時彼はコーヒーを所望した。同夫人の妹メラニー・オウエンとその娘も同席していた。“お陰で、この家でコーヒーが飲めます。私達だけの時は、姉は日本の緑茶しか飲ませてくれません”とのことであつたので気付いてみると夫人だけが日本茶を飲んでいて。彼は夫人に「質問に対して何気なく答えただけです。飲食物に好みは無いからどちらでもよかったです」と弁解に努めた。夫人の日本趣味は日本の事物に対する深い理解に基づいたものであると田部は述べている。大正13年に排日法案が議会を通過した。夫人は、スイスのジュネーブに移り、一年程後に故郷バージニア州に帰ったとのことである。田部氏はハーンの伝記を書く為に夫人と面会や文通を繰返したものらしい。

ウェットモーア未亡人は1922年6月松江にハーン旧宅を訪れ、芳名録に下記の通り記載して今は亡き親友を偲<sup>しの</sup>んだということである。

After thirty years of separation,  
I meet again the beautiful spirit  
of my friend, Lafcadio Hearn lingering  
like the perfume of incense in the house  
he so much loved.

別れしよりここに三十年  
彼が慈<sup>いつくしみ</sup>の旧居にて  
芳香の如く漂<sup>たぐよ</sup>うわが友  
ラフカディオ・ハーンに  
再び相会す (西野氏訳)

b. ミッチェル・マクドナルド

ハーンは“知られぬ日本の面影”(Glimpses of Unfamiliar Japan)と“影”(Shadowings)をこの人に捧げた。前述の通りビスランド嬢からの紹介状を持って横浜グランドホテルに訪れ会食したのが二人の友情の始まり。1853年 Pennsylvania 州スクールキル・キャウンティ (Schuylkill County) に生まれた。両親はアイルランドからの移住者。米国海軍主計少将(米国では主計少将が最高位——原注)数年間ずつ5回日本駐在。退職後日本に永住のつもりで大正9年横浜グランド・ホテルの社長に就任。大正12年9月1日散歩から帰って部屋に入ると同時に、被災死去。この人の第二回目の駐在中は、ハーンの富久町居住時代であり、ハーンが遊びに来てこのホテルに泊ったこともある。初の間はマクドナルドはハーンを多数の人に紹介したが、ハーンは“見せ物ではない”とて不機嫌であったのでそれからは止めた。第三回目駐在時代にハーンが死去した。この頃、ハーンは横浜へ出向かず、マクドナルドの<sup>おとづれ</sup>訪を待ち受けることにしていた。ハーンの大卒後、殆んど毎日曜日にマクドナルドが西大久保のハーン宅を訪れた。ハーンの妻セツは“思い出の記”の中で「笑う(ハーンが)時にも二つあります。一つは優しい笑い方、も一つは何もかも打忘れて笑うのです。この笑は一家中皆笑わせる面白そうな笑で、女中までが貰い笑を致しました。大学をやめた当時、日本に駐在でしたマクドナルドさんが横浜から毎日曜にお出になりました時などは書斎からヘルンのこの笑い声が致しますので、家内中どんなに貰い笑をしたか知れません」と追憶している。

田部氏がこの人の経歴を問うた時“私は一生涯このような事務官の仕事をして来たこと以外語るに足る事は、何もありませんでした。ただ一つだけ誇に思う事は、ハーンの友人であったことです”と答えたとのことである。さてハーンの没後、外国で、その著書出版や著作権等に関し遺族の後見人設定の問題が出た時、梅謙次郎(筆者注：松江出身の法学者、東大教授、民法商法の起草に当たった)がマクドナルドを推選すると快諾し親友の遺族の為に最大限の尽力をした。(ハーンがその一国ぶりを発揮し、出版社から印税、原稿料を受け取ることを拒絶した時のマクドナルドの措置は既述した)即ち、著作権の一部を書店へ売却するに当って交渉係を担当し、自分で訴訟を起してハーンの蔵書をグールドから取返し(付記参照。)、ハーンの草稿の一部を高価に売却し更に、ハーンの「書簡集」は彼の仲介によって生前の印税の二倍以上に引き上げられたことは既述した。グールドから取返したフローベルの「聖アンソニーの誘惑」(付記参照。)の反訳を自分の費用で

出版した。ハーンの東京大学での講義内容の筆記記録の出版（ハーンの教室で聴講した学生達の筆記帳を借り受けて、彼自らタイプライターで、又はタイピストを雇入れて出版原稿を作成した）当時彼は米国東洋艦隊の主計長としての職務に費したよりも遙かに多量の時間とエネルギーをこの出版事業のために費したとゆうことである。ハーンが“私の死後遺族がどうなるであろう”と言った時、彼は“大丈夫心配するには及ばない”と言った。ハーンは夫人に“あの人は親切で頼もしい友人、敵としては強く恐い人。喧嘩して負けたことのない人”と言っていた、と。グラント・ホテル社長として、火災保険契約の際に地震を加えるのがよいと思ってそのように契約したのでその会社は震災による損害は大きくなかった。彼の没後遺言状で、ハーンの相続人へ多額の遺産を与えていたことが発見された。彼は米国でも日本でも飲料としては、日本の「ウイルクソン炭酸水」しか飲まなかった。不老不死の薬として宣伝しつつ。

ハーンの著書の愛読者の一人に、ジャム(タイ国)駐在米国公使ジョン・バレットが居た。ハーンの著書は全部読んでいた。日本に立寄ってハーンに面会したいと思い東京の米国公使館と連絡したが絶望的であった。当時横浜に居たマクドナルドに相談することを勧められたので彼に頼んだ。前述の通り、ハーンは人に紹介されるのを嫌っていたので、偶然行き逢ったように工夫する他はない。マクドナルドはバレットに“ハーンは金曜日に大学の講義終了次第来浜、日曜日まで滞在する。あなたは土曜日の午前中に来て私の部室の戸をノックしなさい。私は“カムイン”と言う。それから“紹介”と言わないで“こちらはミスター・ジョン・バレット”と言うときめた。事態は脚本通り進行した。ハーンは公使と二時間程談話して甚だ愉快そうであった。公使は演説と座談の名手。帰国後公使はルーズベルト大統領にこの話をして共に楽しんだと。マクドナルドは“私がハーンを騙したの<sup>は</sup>前にも後にも、唯一回この時だけであった”と語った、という。

#### c. エルウッド・ヘンドリック

1861年ニュー・ヨーク州オルバニー“Albany”生れ。1888年にニュー・ヨークでハーンが得た友人。ハーンが打ち明けた書簡を最も多く送った若い心友。彼はハーンの遺族に思い出を書き送って述べた。

“私がラフカディオの友人であったと言うよりは、ラフガディオが私の友人であったと言う方が至当です。何故となれば、私が彼に与えた手助けや世話は、彼が私にしてくれた親切な手助けと深い同情に比べると、到底比較にならないからです。ニュー・ヨークに居た時は雑踏の急がしい騒がしい道路を通ることは、彼にとって中中<sup>ひび</sup>難しかったので、私は手助けの為一緒に通りました。彼は難しいことを人に頼むような人ではありません。私がした事ぐらい誰でも出来る事です。ところが彼は私にあらゆる親切を尽してくれました。他の人には出来ない様な親切を尽してくれました。私は何年間も、日記でも書く様に、何でも彼に書き送って打ち明けました。不幸の時や腹の立つ時は、何だか彼に言わないで居られない様な気がしました。何故だか分かりません。ただ彼の深い知恵と広い心でそれに同情してくれると思ったからでしょう。そして何時でも驚くべ

き知恵を与えてくれました。時時は<sup>は</sup>誉めてくれました。時にはそれはいけないと言ってくれました。しかしその時は<sup>やさ</sup>しく、親切に申しましたので、私は怒ったことはありません。時時やけを起しそうな時には、彼は巧みに救ってくれました”と。

田部氏がヘンドリックに、ハーンと交際するに至った状況の説明と短い自己紹介を求めた。彼は言う。“ラフカディオがニュー・ヨークに居たのは1888年冬から翌春迄であったと思う。当時私はローリンス夫妻の家に居た。夫人はアリス・ウエリントン・ローリンスと言って文人でした。ビスタンド嬢を通じて彼も知っていたので某日彼を晚餐に招待した。家分らないので遅刻して来て困っていた。ローリンス夫人は彼に紹介する為に多数の文人を招待した。彼はそれが気に入らないから黙っていた。彼が困っているのを察して、今夜外へ行く約束がある。是非と言う会でないから、また道に迷わない様に同行しよう、と私が言った。その夜紳士淑女の文学談から解放の機会を彼は甚だ巧に<sup>つか</sup>擲んだ。10分程後に私達は外出。これが交際の始です。ピヤールホールで翌朝1時頃まで話し込んだ。翌春の彼の日本への旅立まで週二三回は会った。朝彼の家で晩の約束をした。彼はどんな人が好きか分った。生意気な気どり屋と冷淡な人間は大嫌であった。その様な人の居る所へは彼を連れ出さぬようにした。

ニュー・ヨークで、彼が最後の夜をどんな風に過したかについては、余りはっきりとは覚えていない。私は先に出発して、彼を待ち受けて居るようにして（彼の日本行の途中）オルバーニーにも立ち寄らせました。父の家はオルバーニーから8マイル程離れた場所にある立派な建物でした。ラフカディオがその家に泊ったかどうか覚えて居りません。ただ私が今でも、はっきり覚えているのは、私の兄がラフカディオの承諾の返事を受け取った上で午餐会に数人の親しいお客を招待することが出来たことでした。私達は、皆会合を盛大にと心掛けた。兄はいよいよ日本へ向って行く彼の為に、「ニュー・ヨークでの最後の御馳走」というので大いに歓待したことを覚えている。しかし私は彼と別れるのが悲しかった事と、彼は日本のことが気がかりであったことで、この日の会合は沈んでいた。しかし兄は中中人を喜ばせる手腕があった。それから兄と私は彼と共に停車場に<sup>おもむ</sup>赴いて、彼が汽車に乗って日役の方へ行くのを見送った……。”

ヘンドリックの自己紹介によると1877年ドイツへ渡り17才の時チューリッヒの大学へ入り化学を学び、オルバーニーへ帰って応用化学の工場を造り1881年から1884年まで営業したが失敗した。1884年からニュー・ヨークに出て火災保険事業に従った。ハーンに<sup>あ</sup>遇ったのはこの頃であった。その後1890年ロンドンの或る会社の為に、アトランタ、リッチモンドへ、1896年にはボストンへ赴任した。貧民に音楽を教える団体や盲人教育のそれに関係して居る。共和党员である。文芸の素養あり「大西洋評論」“The Atlantic Review”の寄稿家であった。結婚後新妻の写真をハーンに送った時ハーンは卒直な批評を書き送った。その返事が後れたので、ハーンは怒られたものと早合点して“人間というものは妻帯すると友人を捨てるものだ。私もボストンの親友を失ったのか”と落胆した。ヘンドリックはそんなことには頓着しなかった。二人の友情は最後まで変ることが無かった。大正14年の或る日この人の娘が来日しハーンの遺族を訪問した。

付 記 ハーンの著作を読んで賞讃の手紙を送って友人となったフィラデルフィアの眼科医グールドに、ハーンは日本へ向けて出発するに当たって、その蔵書その他のものを預った。ハーンは来日した時、その眼科医に80ドルの負債があった。さてハーンは前述のようにハーバー社と絶縁し困窮甚しかった丁度その時に返済を迫られたので該書籍を処分してくれるよう通信し書籍全部は失なわれたものと諦めていた。ハーンの没後グールドは講演や文章の中で大いにハーンを賞讃し自らハーンの親友であったとしその蔵書全部は親友が自分に譲渡したと言った。後にウエットモア夫人のハーン伝記が出版されたのでその書籍の経緯が明かとなった。そこで、ミッチェル・マクドナルドは怒心頭に発するや、弁護士カメルなる者を代理として訴訟に及び、前記金額回収の為売却した残余の蔵書とフローベルの「聖アントニーの誘惑」の反訳原稿（ハーンが反訳したが出版者が見つからないで原稿のままになっていたもの）を取帰したが彼の創作、反訳のメモ、切抜帳等は返らなかった。この事件のためグールドは名声を失墜し、フィラデルフィアで、当時の金で1日500ドルの収入があった眼科医業を止め、ニュー・ヨークの効外に退いて再びフィラデルフィアに帰ることがなかった、と。 (未完)

参 考 文 献

広瀬朝光著「小泉八雲論」  
雑誌（八雲会事務局）「へるん」

小泉八雲集（第一書房）  
池野誠著「松江の小泉八雲」

西野影四郎著「炎と光の人小泉八雲」  
田部隆次著「小泉八雲」



東京文科大学時代のハーン（50才）



1897年（明治30年頃のエリザベス・ウエットモア夫人（36才）



1900年（明治33年）頃のハーンとマクドナルド。（ハーン50才、マクドナルド47才）